白水社 創立85周年記念企画

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24／tel.03-3291-7811／振替00190-5-33228／http://www.hakusuisha.co.jp●表示価格は税別です。別途に消費税が加算されます。

■内容■
パリ歴史事典
アナトール・フランス小説集／ヴィヨン詩集成／カフカ小説全集
フランス 食の事典／現代フランス広文典／白水社-ラルース仏和辞典

パリ歴史事典

アルフレッド・フィエロ【著】　鹿島 茂【監訳】
青木真紀子・荒木善太・尾河直哉・谷とも子・中条忠穂・中条直平・塚本昌則
野崎 歓・平岡 敦・平野隆文・堀江敏幸・松村恵理・松村 剛【訳】

文化・政治・思想から芸術・風俗・習慣まで
数多の項目に浮かびあがる千年の都パリの素顔。
人間のあらゆる営みを描きだした、読み物としても抜群に面白い事典です。

A5判／830頁／箱入　本体9,500円
■2000年10月下旬発売■

監訳者の言葉……鹿島 茂

もう二十年以上も前のことだが、パリの街を歩き回っているうちに、パリに関することならどんなことでも載っている『パリ歴史事典』というものをつくったらどうだろうと夢想するようになった。たとえば、馬車という項目を引けば、パリにおける自家用馬車と乗合馬車についての事柄が歴史を追って記述されていて、ときどきの興味深いエピソードがちりばめられている。またデパートのことを調べたいと思ったら、デパートの前史から、誕生、発展まで、なにもかも出ている。万国博覧会も同じく、内国博覧会から一九三七年の最後のパリ万博まで各回ごとにその特徴が述べられているという具合。

そこで、この手のパリに関する歴史事典というものはないかと古書を漁り始めたが、街路の事典やモニュメントの事典というのはあってもテーマ別の読み物事典というのは案外少ないことに気づいた。一番、私の構想に近いのはラルースから一九六四年に出た『パリ歴史事典』そのものではないか！　いや、夢想をはるかに超えている。なぜなら、私がいろいろと構想を練った項目はもちろんのこと、まったく思いつきもしなかったような項目がずらりと並んでいるからである。いや、これはおもしろい。最悪、翻訳すべしといって、監訳者を引き受けることになったが、ゲラがあがってくると、監訳者であることを忘れて、しばし、読み耽ってしまうことが一度や二度でない。

たとえば、「巨石（Mégalithe）」の項目を引くと、パリには十八世紀頃までは紀元前の巨石文化の痕跡が残っていて、文書にもそれがちゃんと記録されているという。中でも興味深いのは市庁舎付近にあった「悪魔の屁」と呼ばれた巨石である。というのも、この巨石は十五世紀に権力と学生の間で繰り広げられた暴力沙汰の標的になり、学生と権力の間で取ったり取られたりを繰り返したからである。まず学生がこれを引き倒してカルチエ・ラタンに持ち帰り、サン＝ティレール山に立てると、権力はすぐさま奪還しテ島の裁判所の中庭に据えた（《Dictionnaire de Paris》）だが、これはモニュメント事典とテーマ別読み物事典の中間のような感じで、いま一つ徹底性に欠けた、やはり、私が夢想したような事典は存在していないのである。

かくなるうえは、自分で作るしかないと、まず馬車についてのモノグラフィーを書いたのが、私の事実上の処女作である『馬車が買いたい！』（白水社　一九九〇年。ついで『新聞王伝説』『デパート』を発刊した夫婦『絶景、パリ万国博覧会』と矢継ぎ早に本を出したが、これはみな、読みたいと思ったのに存在していない『パリ歴史事典』に対する欠乏感のなせるわざであった。

ところが、数年前のこと、白水社のK氏がロベール・ラフォン社から出ている Bouquins シリーズの一冊をもって現われ、翻訳を検討してもらえないかといってきた。手に取ると、なんたることか、これこそ真、私が夢想していた『パリ歴史事典』そのものではないか！　いや、夢想をはるかに超えている。なぜなら、私がいろいろと構想を練った項目はもちろんのこと、まったく思いつきもしなかったような項目がずらりと並んでいるからである。いや、これはおもしろい。最悪、翻訳すべしといって、監訳者を引き受けることになったが、ゲラがあがってくると、監訳者であることを忘れて、しばし、読み耽ってしまうことが一度や二度でない。

たとえば、「巨石（Mégalithe）」の項目を引くと、パリには十八世紀頃までは紀元前の巨石文化の痕跡が残っていて、文書にもそれがちゃんと記録されているという。中でも興味深いのは市庁舎付近にあった「悪魔の屁」と呼ばれた巨石である。というのも、この巨石は十五世紀に権力と学生の間で繰り広げられた暴力沙汰の標的になり、学生と権力の間で取ったり取られたりを繰り返したからである。まず学生がこれを引き倒してカルチエ・ラタンに持ち帰り、サン＝ティレール山に立てると、権力はすぐさま奪還しテ島の裁判所の中庭に据えたが、学生は負けじと巨石を奪い取りかえし、またもや山の上においた。だが最後は権力の弾圧の前に学生が敗れて、以後、巨石は行方不明になってしまったという。学生に蜂起の口実を与えぬよう、巨石は処分されたようだ。そして、最後に著者はさりげなく、こう付け加えている。「フランソワ・ヴィヨンがこれらの出来事にかかわったという伝説は真実であるらしい。彼の大作『遺言書』の中には『〈悪魔の屁〉の詩』が綴られている」

また、この事典の特長は文化ばかりか自然地理、人文地理的な要素にも目配りがきいていることで、パリに生息する動物や昆虫にも案外多くのページが割かれている。一例をあげると、蜜蜂は新大陸で砂糖が栽培されるまでは、貴重な甘みのもとである蜂蜜を得るために近郊で盛んに飼われていたという。「リュクサンブール公園農業学校の養蜂所では、毎年二キロの蜂蜜が獲れる。（中略）一般に知られた『公認』の養蜂所はさまざまな場所にあり（中略）、ガルニエ設計によるオペラ座の広々とした屋根の上のものが有名である。」これなど、そのままエッセイのネタに使えそうな情報ではないか。

また、「アルルカン」というなんのことか意味不明の項目があるのでのぞいてみると、アルルカンとは、大邸宅や大使館などから残飯として出る「調理済みの肉」のことであり、その残飯肉を扱う業者が「宝石屋」と呼ばれたと書かれている。この「アルルカン」はペット用として買われるほか、小さな定食屋が「本日の定食の一品として使うこともあったらしい。

このように、多少ともパリに興味ある人なら、一度手に取ったら最後、次々にページを捲らざるをえない事典である。

本書の翻訳によって、私の二十年前の夢想はここに現実化したのである。

プチ・ポンから見たオテル＝デュー病院

フランス 食の事典

日仏料理協会【編】
宇田川政喜・遠藤智子・加藤綾子・橋村弘美・堀田小百合・牧野祐子・矢舟啓修
【協力】大庭 巌・河村育三
ジョルジュ・トラングル・田中健一郎

食材、飲物、菓子、料理人、美食家、
レストラン、そしてルセットと、
世界に冠たるフランス食文化の
すべてが分かる。
日本語索引、仏英伊語索引付き。

菊判／950頁／箱入　本体12,000円
■2000年10月下旬発売■

編者の言葉
日仏料理協会

二十一世紀の到来を目前にし、世界の文化がグローバル化、均質化の傾向にある現在、各種文化の中で最も保守的である食文化においても多様化の一方、普遍化の方向にあります。

世界を席捲したフランスの食文化の変遷を歴史的にまた社会階層的に見つめ直すことは、この流れに合致したものであり、本書刊行の目的でもあります。

この事典はフランス料理の料理長やメトル・ドテルが求めている情報をすべて盛り込んだ、フランスの飲食に関する総合事典です。

タイトル『フランス 食の事典』は《Encyclopédie de la Gastronomie Française》つまり「フランス・ガストロノミの事典」という意味で名づけたものです。ガストロノミは一般に「美食」と訳されていますが、単に「美味なるもの」、または「食べること」ではなく、それを「食べること」ではなく、料理、菓子、食材、ワイン、チーズ、サーヴィスなど直接飲食にかかわるあらゆる事象に加え、該当する文学や科学といった情報の総合分野のことです。しかし、残念ながらいまだに適切な訳語がありません。

項目の最後などにある矢印は「参照して下さい」ということです。矢印につられてページをめくり、思わず知らずフランス・ガストロノミのラビリンスをさまよってみたくはないかがでしょうか。

本書が、ガストロノミという身近で興味深いテーマを通じて社会や人間の理解を深める一助となれば幸いです。

この事典の特徴

■食材、調理、ワインなどの飲物、チーズなどの乳製品、食肉加工品、スパイス、ソース、菓子、サーヴィス、器具、政治・経済・文学など各界の美食家、名料理人、レストランなど、食のあらゆる分野にわたる見出し二四〇〇、副見出し・小見出し多数。

■古典料理から、ブルジョワ・地方・家庭料理にいたる、ソース、付け合わせ、飲物、デザートなどを含むルセット二三〇〇。

■見出し語にはフランス語、英語、イタリア語の綴りをつけ、フランス語発音カナ表記を添えた。

■古代ローマからヌーヴェル・キュイジーヌまで、時代区分別に食の世界とその歴史的背景を解説。

■フランスの各地方ごとに食材や料理の特徴、ワイン、チーズなどを記載。

■食材や料理名の由来、語源を説明。

■矢印で関連項目へ進み、思わぬ知識をえられる。

■食材からも、調理法からもルセットを検索できる。

■器具や容器、生地の折り方、肉の部位などはイラストつき。

■索引は、日本語索引、仏・英・伊語索引の2本立て。

現代フランス広文典

目黒士門【著】

疑問氷解！ フランス文法のすべてを網羅した座右の一冊

大正15年の「仏蘭西廣文典」に発し、ロングセラーを続けてきた「新フランス広文典」の全面改稿新版。発音、文の構成から句読法まで、正しく読み、書き、話すために必要な文法事項のすべてを統辞論に目くばりしながら品詞別に詳述し、豊富な注によって、学習者が突き当たる例外についても細大もらさず言及、詳細な事項索引と語句索引によって事典機能も備えた21世紀の広文典。通読して文法の奥深さを学び、座右に置いては、あらゆる疑問に答える友となる、入門者から研究者まで本格的フランス語学習に欠かせぬ一冊。【文典＝文法を説明した書物（広辞苑）】

A5判／400頁　本体3,600円
■2000年10月中旬発売■

白水社-ラルース仏和辞典

三宅徳嘉・六鹿 豊・フランス・ドルヌ／他【編】

こんな辞書は今までになかった！　言葉の神秘に迫る究極の一冊！

生活環境や文化風土が異なれば、そこに生活する人の考え方も違う。精神構造が異なれば、言語メカニズムも異なる。だから、言語の真のメッセージを理解し、フランス語を「読む」「話す」「書く」といった総合的視点で使うためには、メカニズムの正確な理解が必至だ。

この辞書は、Dictionnaire du français langue étrangère,Niveau 2（ラルース社）の研究成果を取り入れ、日常生活に必要十分な見出し語8000語のメカニズムを、可能な限り徹底的に追求した初めての辞書なのだ。なによりもまず、現代フランスの日常場面をそのまま切り取ったような例文が、まる暗記したくなるほど新鮮である。文の核となる動詞については、「構文パターン」を示すにとどまらず、主語や目的語にどういう意味内容がくるかを具体的に示した。名詞、形容詞、副詞の「文法的な分類」は初めての試み。ともかく、ぱっと引いて閉じるのはもったいない。じっくり読み込んでほしい一冊である。

B6変型判／1250頁／箱入　予価・本体4,200円
■2001年3月発売■

白水社 創立85周年記念企画

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24／tel.03-3291-7811／振替00190-5-33228／http://www.hakusuisha.co.jp ●表示価格は税別です。別途に消費税が加算されます。

アナトール・フランス小説集

渡邊一夫・伊吹武彦・杉捷夫／他【訳】

［新装復刊／全12巻同時刊行］

真の小説好きの味読に耐える長篇と珠玉の短篇を集める。
端麗な文章と軽妙な諷刺で人間の愚かさといとおしさを鮮やかに描き出す、フランス文学の最高峰。

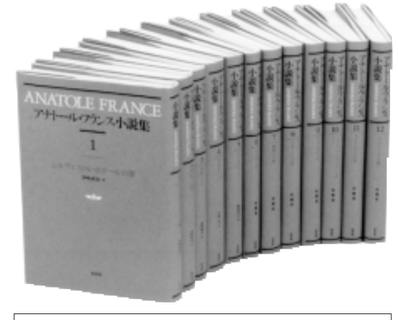
アナトール・フランスとは…

フランスという国名をとおしているこの人は、本名はアナトール・フランソワ・チボー。一八四四年、セーヌ左岸の古書店の一人息子として生まれ、幼少の頃から古書のなかで育った。図書館司書として自立しながら作家として自立し、『シルヴェストル・ボナールの罪』を発表、ここに後者は世事に疎い老学士院会員をめぐるエピソードを静かなしみじみとした口調で語り、大評判をとった。さらに、聖書に想を求めた『バルタザール』、『螺鈿の手箱』、舞姫と修道僧を登場させ、霊と肉に引き裂かれている現世の人間の姿を舞台を古代にかりて描いた『舞姫タイス』、イタリアのアッシジを舞台にした『聖女クラフラの泉』などの傑作を次々に発表、文名はとみに高まった。『舞姫タイス』はマスネによるオペラ化もあり、世界的なベスト・セラーになった。また、社交界の花形であったカイヤヴェ夫人と親しく交わり、その体験を素材にした『赤い百合』は、舞台をパリの灰色の空の下と、フィレンツェの紺碧の空の下におき、情緒豊かな雰囲気のうちに、社交界の男女の愛欲の世界を展開させている。A・フランスの唯一の恋愛心理小説である。

ドレフュス事件が勃発すると、ゾラの「われ弾劾す」（一八九八年）に署名するなど、官能的・肉欲的なきわどい描写とが織りあわされている。また、物語としての面白さとは別に、本筋からそれたところで語られる、作者の道草や作中人物の自由な雑談にも、読書欲をかき立てる大きな魅力がある。

一九二一年にはノーベル文学賞を受け、文豪の名をほしいままにしつつ、一九二四年死去。

新装復刊では読みやすさを考慮して新漢字・新仮名づかいを採用。



全巻内容

① シルヴェストル・ボナールの罪　二九六頁　本体二六〇〇円　伊吹武彦訳
② 神々は渇く　三八二頁　本体二八〇〇円　水野成夫訳
③ 舞姫タイス　二八八頁　本体二六〇〇円　水野成夫訳
④ 赤い百合　四四六頁　本体二八〇〇円　小林正訳
⑤ 小さなピエール　三〇四頁　本体二六〇〇円　岡田真吉訳
⑥ バルタザール　二五四頁　本体二四〇〇円　山内義雄他訳
⑦ 螺鈿の手箱　三〇四頁　本体二六〇〇円　内藤濯他訳
⑧ 聖女クラフラの泉　二八八頁　本体二六〇〇円　渡邊一夫他訳
⑨ クランクビーユ　二四八頁　本体二四〇〇円　杉捷夫他訳
⑩ ジャック・トゥルヌブローシュのコント　二六四頁　本体二四〇〇円　今日出海他訳
⑪ 青ひげの七人の妻　二四〇頁　本体二四〇〇円　杉捷夫他訳
⑫ ジョカストとやせ猫　二六四頁　本体二四〇〇円　佐藤正彰他訳

各四六判／セット本体30,600円
■発売中■

ヴィヨン詩集成

天沢退二郎【訳】

十五世紀、放浪の詩人ヴィヨンが遺した詩篇を、現存する様々な写本、異本にあたり、詳細な注解を付して訳出・集成したミレニアム二〇〇〇ヴィヨン詩集。
天沢退二郎現代口語訳。

四六判／420頁
本体4,500円
■発売中■

ヴィヨン詩にはつねに諸本信太郎の名訳があり、自分などの出る幕はないと思っていた。それが、いつのまにか新訳の企てに引き寄せられてきたのは、一九六〇年代後半のフラビエ先生の来日セミネール、七〇年代半ばの、リシュネル・アンリ本刊行、そしてデュフルネ先生の来日セミネール等の刺戟による。中でも決定的だったのはRH本の衝撃である。

この新校訂版によって、ヴィヨン詩のテクストが、各写本・伝本間の異同のみならず、それら本文・異本文の網目を読者がどう読み渡るかによって、語や語句や行の一一が可動的であり、多義的であり、相対的であることを知った。つまり、ヴィヨン詩はまるで生き物であり、同時にまた、迷宮的建築物でもあるということだ（さらにこの特色は、「十五世紀パリ」の時代的・社会的特質にも照応している。とすれば、翻訳はいく通りもありうるし、過去にどんな名訳があっても、それが唯一でなければならない理由はない。

訳者の言葉

文学作品の、他国語への翻訳は、一種の演奏であると私は思う。全く同一の楽譜を演奏しても、弾き手が異なれば味わいの異なる演奏となることは周知の通りだ。ましてや、同じ曲の楽譜にも、さまざまな異同がある場合には、演奏の多様性はいよいよ増大してふしぎはない。

ヴィヨン詩の場合がまさにそれだ。

このように心を決めた、というのも
目の前のあの女がわたしに
おまえなんか死ねばいいと言ったのだ
その方が自分に都合がいいわけでもないくせに。
つらいつらい、この愁訴　天までとどけ。
あの女への罰を下されますよう、
あらゆる愛の神々にお願いしよう
そしてこの愛欲の苦しみを軽くしてくださるように。

「形見分け」第3遺篇

カフカ小説全集

池内紀【個人訳】

［全6巻］

長い間待たれていた、カフカの手稿そのものをテキストとした新校訂版全集。
新たな光に照らし出されるカフカ文学を、池内紀個人訳で贈る21世紀への遺産。

全巻内容

訂正版所の採択にも及んでいたのではなかろうか。ブロート自身、「独自の判断」を隠さなかったからにはなおさらである。

ブロートの死（一九六八年）とともに、カフカのノートが「解禁」になった。このときを待っていたかのように、カフカ全集の版元であるドイツのフィッシャー書店に新しい全集のための研究者集団がつくられた。そして二十年あまりにわたり精力的に取り組んだ結果、そのなかからゆっくりと、もう一つのカフカが誕生した。

池内紀個人訳・カフカ小説全集は、この「新しいカフカ」により、つぎのような構成をとっている。

①『失踪者』
②『審判』
③『城』
④『変身 ほか』
⑤『万里の長城 ほか』
⑥『掟の問題 ほか』

はじめの三巻はいずれも死後に刊行をみた長篇小説であり、『失踪者』とは聞きなれないタイトルだが、これまでは『アメリカ』といった。小説の舞台がアメリカなので、ブロートが命名した。カフカ自身は『失踪者』を予定していた。「いま書いている小説は、とめどなくつづきそうなのだが、さしあたり少し説明しておくと『失踪者』というタイトルで、アメリカを舞台にしている」（フェリーツェ宛の手紙）

主人公カール・ロスマンは、これまでは十六歳だったが、新テキストでは十七歳。カフカはあきらかに主人公を少年ではなく青年として考えていた。大人の世界に踏みこんだ最初の年齢。そんな、ちいさな大人、がアメリカ社会を遍歴したあげく、大陸の一点で失踪する。

二巻目の『審判』は英語ではプロセス、「経過」「過程」の意味である。銀行員ヨーゼフ・Kをめぐり、いかなる経過が述べられているのか？罪を犯した覚えがないのに逮捕された、その男が、自分の罪を捜して歩く、とどのつまりは処刑の一夜にいきつくまでのプロセス、その過程が語られている。

カフカは書き上げた原稿と未完のものとを、はっきり区別して残していた。このたびの新版ではカフカの書きぶりが明瞭に見てとれる。主人公の日常に、身に覚えのないなんともおかしな日常を、カフカは笑いをこらえるようにして書いていった。

『城』は、もともと「閉じこめる」という意味のドイツ語から生まれた言葉。つまりは城のある村に閉じこめられた男の物語。失踪・経過・幽閉とつながって、三つの長篇小説が大きく三部作の構成をもつことがうかがえる。

のこりの三巻は小品・短篇・断片にあてられている。カフカ自身が生前に刊行したもの、ノートに残したものをすべて収める。これまでのブロート版でつけられているタイトルが、必ずしもカフカのもっていたイメージでないことが判るだろう。また物語はしばしば思いがけない末尾をもっていた。

カフカの小説は風変わりだ。ある朝、セールスマンが目覚めてみると、からだが虫に変わっていた。ある銀行員は何一つ悪いことをした覚えがないのに逮捕された。城のある村にやってきた測量士は、めざす城へと歩いていく、かなたにくっきり見えているのに、さっぱり行きつけない――。

たしかに風変わりだが、しかし難解なところは少しもない。ストーリイにシャレっけがあって、描写は的確で、ほんの少し登場するだけの人物までも生きいきとした個性をもち、生彩に富んでいる。

ふつうの小説とちがっているとすれば、固定した観念をもちたがる読者を、いわば「白紙状態」に引きもどすための跳躍を含ませてあるからではあるまいか。このように自由で身軽な跳躍は、えてして難解と見あやまれる。

友人・知人の伝えるカフカは、もの静かで、いたって謙虚な人だった。半官半民の役所に勤め、事務カバンを抱いて出張する、女性を変するたびに誠実に悩んだ、死の病であった結核にノドを冒されながら、我慢づよく治療を耐えた。

動め先から帰ってくると仮眠をとり、夜中には起きて、せっせとノートに書いていった。書きつづけるために独身を選び、家庭の幸せをそっくり捨てた。一見謙虚な人物とつかずはなれず、野心家カフカがいた。

いずれ自分の時代がくると、かたく心に期していた男である。死が迫ったとき、ノートやメモ類一切を友人に託して、焼き捨てるようにいった。つまりは書きあげたものが自分の意に満たなかったからである。「悪夢を書きちらしただけ」などとも述べたというが、これほどの作品を仕上げておきながら憂鬱などと言い捨てるとは、なんと強烈な作品意識を伝えていることだろう。

訳者の言葉

カフカなんかいなければよかったのに、と思う。

もしもカフカという作家が存在しなかったならば、『審判』や『失踪者』や『城』を書かなかったならば、世界はもう少しまともだったのではないか、こんなに不条理なことにはなっていなかったのではないか。

これは、もちろん、不当な言いがかりである。カフカが世界を変えたのではない。彼は世界の本当の姿を明らかにしてしまっただけだ。

古代的な予定調和の世界像がすっかり崩れてしまったことに、何百年かの間、人々はわざと気付かぬふりをしてきた。目をしっかり閉じていればおびえは消えると信じている子供のようにふるまってきた。しかし、カフカは大きく目を開いて見てしまった。世界はなんなにきちんとした、筋の通った、明るい場所ではないことを見てとって、それを書いてしまった。

だから、カフカ以後のぼくたちは、成人する途中で、カフカ的な認識のショックを体験し、それに耐え、通過しなければならないことになった。先が見えないこと、予定がたたないこと、自分が置かれた状況について上からは何の説明も与えられないこと。これらは理由なき不運ではなく、この世界の本質である。上告が棄却されるならまだいい。実際には、上告が受理されたかどうかさえ知らされないまま待たされるのだ。これがぼくたちの生の条件なのだ。

というぼくのカフカ観は違っているかもしれない。まるっきり誤読の果ての誤解かもしれない。そういう不安がつきまとう。だからこそ、改めてこの日本語で、骨が太くてしかもしなやかな池内紀の日本語で、読みなおしてみたいと思う。

ともかく、カフカなしでやっていける時代じゃないんだから。

作家

新しいカフカを推す

池澤夏樹

推薦の言葉

杉本秀太郎

文学は流行する。ある時期、ある流派がはやれば、その流行に打撃をあたえる新しい流行が、かならず次に流行する――読者を巻き込んで、そこで、賢こい人が言うことに、書店に平積みにしてある小説、見る間に買い手のつくような文学書には、けっして手を出すな、値打はいずれわかる、わかってから読むべし、と。流行に広告は付きもの。化粧品、薬品、食品、水着、そして『源氏物語』も『京都祇園殺人事件』も、広告すればそれだけ売れる。

アナトール・フランスは、大正時代から昭和時代にかけて流行したことがあるものうちにかぞえられる。ただし大流行ではなく、ちょっとした流行だったのはメーテルリンクと同じくらいだろう。古い伝説、昔の説話のたぐいを知っていればいるほど、おもしろさの深まる文学がある。宗教と政治の双方に対する皮肉、冷嘲がさらに加わって、それでいっそう味の出る文学がある。

それに加えて、社会のからくり、人情の機微がページごとに透かし模様になって秘められている文学がある。アナトール・フランスの小説は、これの典型的な例である。芥川龍之介は無用の、やくたいもない古い話に心を躍らせる人だった。『鼻』『芋粥』『きりしとほろ上人伝』のごとき短篇は、アナトール・フランスの短篇が地上の星となって行く手にきらきらと落ちているのを見たのが縁となって書きしるされた、石川淳の『焼跡のイエス』『かよひ小町』また然り。小林秀雄江藤淳、ああいうえらそうな物言いをする人たちには、アナトール・フランスとの縁はなかった。知識情報、人生論、そんなものは追えば切りがない。アナトール・フランスは、読者がいま立っている場所、坐っている場所、動いている場所で見ているものに、さりげなく多少の注視をうながす。ただそれだけ。それがすばらしい。

（フランス文学者）

●第1回配本／第1巻

『失踪者』

■2000年11月中旬発売■

四六判／350頁
本体2,800円